



松の木と竹竿でとんどの骨組みが出来上がった所、これから上から下に注連縄をまきつけていく（三芳公民館）



1月10日子供達の集めた注連縄に更に補足の注連縄を作り竹を削る大人達（同）



一月四日子供等によって集められた、注連縄の山（今在家地区、吉井公民館）

東予市の とうど

武田 斉

特集
道前平野の歴史と文化

一、とうどの由来

とうどは、古くから東予市・周桑地方に風習として残されて来たもので、太平洋戦争後、生活習慣の大きい変化に伴って、伝統的なものの軽視風潮の強い中で一時的に廃れていったが、伝統文化の復活の波に乗り、新しい意義を見つけて、発展して来ている。それは家内安全・無病息災の祈願から積極的な地域の連帯感の建て直しとか、子供達の健全育成を目指したものである。

とうどとは小正月に行われる火祭り行事のことで、別名では左義長・とんど・さいとう・神明等呼び名が

ある。東予市ではとんど及び神明の名が主で、周桑郡全体でもとんどが主流となっている。火祭りの行事は正月だけでなく、盆等に送り火をする習慣があるように荒神さん・荒々しい靈魂を追い払うという信仰に由来するともいわれている。また、左義長というのは、関東や越後地方で三本の木や竹を結び合わせて三脚にしたもののことで、とんどの土台骨となる形から、この名ができたといえられている。また別に宮中行事として昔三木張・三毬打・散鬼杖などと書き毬打三個を結び合わせて立て、これに扇子と短冊を添え、童子が囃子を笛と小鼓に合わせて謡舞し

たものを天皇が御覧になられたことから始まったとする説もある。

二、とんど行事の変遷

とんど行事の内容については、戦前と戦後では、社会の変化・時代の流れ・家庭生活の改善によって、これに合うように改善されている。例えば、とんどを巻く時期は旧暦の一月四日～十一日頃だったが、今では、太陽暦の一月十日前後の日曜日で燃やすのは一月十五日かその近くの日曜日の朝となっている所が多い。と

んど行事の目的は、戦前では、家内安全・無病息災の祈願が主となっていたが、戦後は寄合社会から集合社会に変化したこともあって連帯感の育成や子供の健全育成に目が向けられている。とんどの製作については形は古代住居の形に変わりはないが、材料が変わって来つつある。昔は藁を円形にして土台を作り、その上に、松・竹等を数本から十本余り円錐形に立てかけ、外側に割り竹を結びつけて原形を作り、その外側に子供らが各家庭から集めて来た注連

縄を上方から下方に巻きつけ最後に一番上に首巻きをつけ、下に入り口をつけて完成である。この中で松の不足と注連縄の不足を補うために、松は枝のみを利用したり注連縄は藁を持ち寄り、大人が作り足している状況である。所によっては、竹竿だけで作成する地域も出はじめている。

とうどの作成場所は過去は、当元と呼ばれた家々に順に巻かれ、巻き終わると酒食の宴もあり、地域の人々もそのふるまい酒に酔う事になったが、今では家の造りの変化等とともに庭が小さくなり、部屋も狭くなった為に公民館や神社、公共施設を借りたり、農家の田を借りて巻く、間借り形式に変わっている。特に田の中に巻くので大型のとうどが出現し人々の目を楽しませている。正月十五日の早朝にはやす（燃やす）のにも火災の心配は少ない上に焼き灰は肥料にもなるので喜ばれている。そのため今では、当元で行っていた酒食の賄いも公共施設で参加者全員に、自治会費であって実施される様になり当元制度も廃れてしまった。

焼けたとんどの灰の中に焼かれている白い餅。これを家に持ち帰り家族で食べて家内安全を祈る（多賀公民館）



とうどに関する調査（表1）

番号	調査項目	戦 前	戦 後
1	呼び名	とうど・神明・とうどう	同じ
2	時 期	旧正月 1月4日～11日 1月15日はやす	1月10日前後の日曜日 1月15日の早朝又は近くの日曜日
3	行事の主体者	小部落単位で当元を中心に若衆・青年団・子供	地区単位 自治会・愛護班・PTA等
4	とうどの数	小部落単位・約100体	自治会単位・54体
5	とうどの意義	家内安全・無病息災	地域の連帯・子供の健全育成・世代間交流
6	素 材	藁 松(5) 竹(10) 吹抜き 神札 注連縄太鼓	竹中心 藁の持ち寄り
7	主要行事内容	注連縄集め(子供)・とうど巻き(当元の家) 吹(当元の家)・とうど焼き(道の辻など)	注連縄集め(子供)・とうど巻き(自治会) 吹抜き(なし)・とうど焼き(自治会)
8	とんど造りの場	当元の家の庭	農家の田・公共施設
9	その他小道具	吹抜き 太鼓	同じ
10	その他	とうどの切り合い 宿泊	切り合い禁止 宿泊などしない

ただ、ひとし 昭和二十六年愛媛大学教育学部中等教育科卒業後教師となり、四〇年間教員として勤務、その間に次の職につく。昭和四十五年教育センター所員、昭和五十八年西条教育事務所指導員、平成二年東条校長会会長、県校長会常任理事、全国中学校長会代議員、平成三年河北中学校退職、退職後は、県文化財保護指導員、歴史の道調査員、民俗芸能調査員、東予市文化財専門委員等を歴任している。

勢でなければならぬ。正月を迎え地域の人々全員で地の神を祭りとうどを巻いて、家内安全・無病息災を祈ってとうどの灰で餅を焼く習慣は美しく、ロマンがあつていい。今も東予市に五十四体も巻かれ優美を競い、人々の連帯感や子供の健全育成を願う姿はほのぼのとした温かさを感じていいではないか。廃仏毀釈ではないが、悪いから毀すのでは文化は繋がないし発展しない。変化する時代に即応し、組織や担い手を替えてつ、意義も新しく見出しながら、伝統の中に新しさを加えて、よりよい文化として育てたいものである。車窓にとうどの姿を見たとき、人々は自分のふる里を思い出して、いつまでも、ほのぼのとした幸せを感じることが出来るのである。

昔は過去一年間に祀られた神社の神札を子供達が集めて、数日ばかりで作成しとうどの周りに飾った吹抜きがあつたが、今それを立てている所はない。市販の布の吹抜きを利用している所はたまにある。とうどの数も東予市では昔は百近くを数えることができたが、今はその半分余りになってしまった。とうどを巻くのも青年団などを中心に行ったものだが今は愛護班・自治会・老人会・PTA等が当たり、縄のない方・結び方の指導からとうどの作り方の指導まで行っている。今でも東予市・周桑郡では、百余りのとうどが巻かれ、荘厳華麗な姿を見せてくれる。とう



1月15日早朝とんどが太鼓の合図で焼かれた。炎に包まれたとんどに集まった人々（庄内公民館）

ど焼きの時に勢いよく燃える早朝空に飛ぶ神札に心までも燃やし、燃える火に竹の先に餅をかざして焼いたものを家に持ち帰り家族で一年の平安を祈ることできるのは幸せである。



注連縄をうまく組み合わせで出来たとんどにお供えを捧げて年の初めの無病息災と家内安全を祈る（楠河公民館）



1月10日華麗・荘厳に巻かれたとんどの雄姿（庄内公民館）

燃え盛るとうどにかざす白き餅
火斗子

三、とうどの調査

表1の通り。

四、とうどと 伝統文化の継承

とうどだけでなく、私達の周辺にある伝統文化について、どう考えていったらよいか、よく文化の継承といわれるが、これをどう受け入れ、どのように保存し発展させていくかということが文化に対する私達の姿